

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H04062

研究課題名(和文) 戦略的・地域景観まちづくりの理論化と実践手法の開発

研究課題名(英文) A research on the theory and practical methodology for strategic regional planning and design respecting its landscape and community

研究代表者

佐々木 葉 (SASAKI, Yoh)

早稲田大学・理工学術院・教授

研究者番号：00220351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、建築物等の色彩や緑のコントロールによる景観形成だけではなく、地域の環境、生計、主体(人とコミュニティ)を包括的にとらえ、変化しつつも持続する地域社会・環境を形成する方策として、景観まちづくりを位置づけている。こうした広義の地域景観まちづくりの実践に役立つ、地域景観の価値や資源の抽出手法、具体の空間デザインの進め方について、各地での実践を通して取り組んだ。また「見た目」を超えた景観の意義についても論じた。

研究成果の概要(英文)：In this research, Regional landscape planning and design is considered that, it should be discussed and practiced not only from the viewpoint of architectural appearance or greenery, but also involving the local environment, livelihood and community, which is changing all the time while the essence remains consistent. In order to develop a better methodology of such landscape planning and design, with the experience of various case studies, the methodology and tools for the extraction of the resource and value of local landscape, as well as a concrete framework of spatial design, are discussed in this thesis. Furthermore, the meaning and significance of viewing landscape beyond the visual images, is also discussed.

研究分野：景観計画・景観デザイン

キーワード：景観 まちづくり 地域計画 景観資源

1. 研究開始当初の背景

2004年に制定された景観に関する初の法制度である景観法には、地域景観形成への期待が寄せられていた。制定後、法に基づく景観計画の策定が多くの自治体で進む一方、その成果が新設建築物等の色彩コントロールなどに限定されているという課題があった。こうした現状に対して、地域の持続的な景観まちづくりの理論と手法の開発の必要性が求められていた。特に地域が抱える諸課題に戦略的に取り組むための実践手法が社会的に必要とされていた。学術的には、景観分析などの個別評価手法の蓄積がある一方、それを地域景観まちづくりの実践に生かすための理論的枠組みや適用プロセスについての研究が必要とされていた。

2. 研究の目的

上記の背景から、本研究課題では、地域景観認識の概念の再検討、地域景観の価値、景観資源の抽出と表現手法の提示、これらを用いた景観まちづくりの理論化と実践による検証、を旨とし、これらによって戦略的地域景観まちづくりを環境(空間)と主体(社会)を統合した実践として展開するためのフレームとツールを提示することを最終的な目的とした。

3. 研究の方法

本研究課題の特徴的な研究方法としては、研究組織メンバーによる各地での実践を通じた知見の獲得と検証がある。そこには被災地の復興まちづくりへの関与も含む。こうした実践を通して、地域景観資源の抽出等の地域空間特性の分析手法の適用、有用性の検証を行なった。あわせて地域の景観まちづくりのそもそもの意義を環境と主体の関係から包括的に捉えるための分野横断的議論を重ね、最終年度にはシンポジウムという形で総括した。

4. 研究成果

最終的な目的に対して得られた研究成果とそれを支える個別の成果を以下にまとめる。なお最終年度2017年7月に早稲田大学にて開催した「地域の持続の形を考えるー千年を生き続けた知恵を活かしふるさとの暮らしを未来につなげるために」と題したシンポジウムにて研究成果を公開、発信した。

(1) 戦略的地域景観まちづくりのフレーム

景観まちづくりをその対象と効果によって整理した(図1)。こうした広がりのある景観まちづくりに対して、多角的、多面的な活動を捉える理論的フレームとして、環境、生計、主体の3つの観点を得ることができた。これは上記シンポジウムのセッションの題目として、学際的な議論の場ともなり得ることを示すことができた。

多面的なアウトカムが期待される景観まちづくり

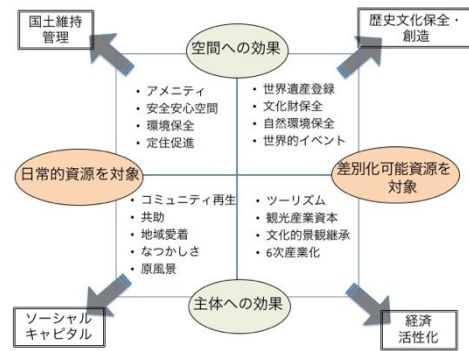


図1 景観まちづくりのひろがり

(2) 地域景観の価値・資源の抽出手法

地域景観特性の読み取り手法例としては、HLC(Historic Landscape Characterization)によって、必ずしも個別建造物の歴史性として認識されていない地域環境の歴史性を分析する手法の有用性を具体的な景観計画策定のプロセスにおいて実証した。これは長野県宮田村の景観計画においてHLCから浮かびあがったtime depthの深い4地区を、歴史的保全区域として指定することができた(図2)。またHLCは地図以外の古写真などの媒体や、Space syntax分析によるIntegration Valueなど他の指標と組み合わせることで、地域特性をより丁寧に把握するための手法となり得ることを示した。

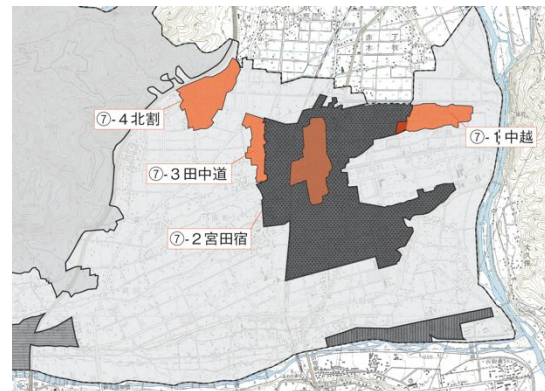


図2 長野県宮田村景観計画におけるHLC分析に基づいた歴史保全区域

また主体によって認識された環境(空間)の読み取り手法として、テキストを用いた分析手法を被災地での地域認識、地域交通や観光計画と連動した実践的な景観まちづくりへの展開するために、プロクマイニング、テキストマイニングの活用を提示した。また理論的フレームの一つの観点である生計に関しては、特に田園風景、文化的景観の議論において、社会環境変化への対応が重要である。一例として新たな景観形成のモデル化について、生産従事者(主体)の意向を内包した提案として、コンパクトファームを検討した(図3)。

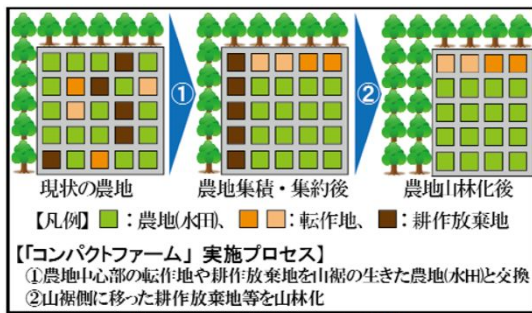


図3 コンパクトファーム概念図

(3) 具体的なデザインの実践

景観まちづくりの実践においては、具体的な空間、インフラのデザインがやはり重要であることが確認され、その対象とデザインのプロセスの特徴を取りまとめた。特に水辺のデザインにおいては、防災上の観点からの整備計画を地域の日常生活空間としての価値の創出機会とするとともに、その実践プロセスに地域資源、社会のインボルブメントを行なった熊本市白川のデザイン実践において、優れた成果を上げることができた(図4)。

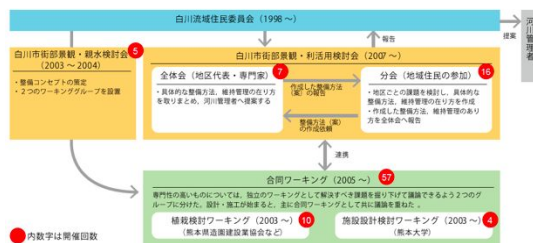


図4 白川におけるデザインプロセス

また岩手県、熊本県において被災地での復興まちづくりを実践するなかから、地域資源の再発見と再構築、その共有プロセスに対しての知見を事例研究として蓄積した。並行してこうした防災に関わる地域戦略としてのインフラ整備の海外での実践について、欧米事例の調査を行い、そのプロセスと具体のデザインの特徴を把握した。

(4) 地域景観に関する理論的枠組み

以上の実践ベースによる研究を支える地域景観認識に関する理論的な議論として、日本における景観保全モデルの国際的な位置付けの確認、景観体験に影響をおよぼす情報メディアを通じた景観把握モデルの基礎的調査、社会環境の変化のなかにある日常生活景の認識構造、巨大構造物の景観認識特性等、知見の蓄積を行なった。それらを通して、環境の視覚像に対する個人の認識のモデル化である既存の景観把握モデルの適用の限界が改めて明らかになるとともに、視覚像に対する印象評価を超えて、環境(空間)と主体(社会)との包括的把握モデルの提示とその重要性を明らかとした。また災害によってふるさとの景観が喪失したことの意味を、景観に対する権利、人権という観点から位置付け、付加価値や地域経済資源という意義以上の

根本的な風景、景観の位置付けについての議論の重要性を提示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計33件)以下すべて査読有

1. 小泉雄大, 横内憲久, 岡田智秀, 「水田を中心とする農村景観保全に向けた「コンパクトファーム」の提案と実現化方策に関する研究 岐阜県恵那市岩村町富田地区をケーススタディとして」、土木学会論文集 D1,74(1),2018,1-14
2. 横田尚己, 山田圭二郎 「熊本地震のつづきに見る感情極性値の時空間解析」、都市計画論文集 56(3)、2017、1081-1087
3. 福島秀哉, 「岩手県上閉伊郡大槌町町方地区復興区画整理事業における近隣コミュニティ単位によるまちづくりワークショップ」、実践政策学、3(2)、2017,147-158
4. 中島直弥, 星野裕司, 「気候変動適応に向けたインフラ計画の展開プロセスと実行支援に関する研究 デンマーク王国コペンハーゲン市のクラウドバーストプランを事例として」、都市計画論文集、52(3),2017、1185-1190
5. Masaru Miyawaki, Methodologies and Challenges of 'View Protection Areas' for Landscape Planning in Japan, City Safe Energy Journal、1-2017,2017,33-47
6. 平野 勝也, 渡邊 佑未, 白柳 洋俊, 「街路認識における物理的要素と人の関係」、土木学会論文集 D1、72,2016,12-13
7. LIM Luong, Sasaki Yoh, 「Review on Research Trends in Watershed-Based Land Use Analysis」、Journal of JSCE D3、4,2016、227-242
8. Akiko YOSHIMURA, Keijiro YAMADA, Hideaki KAWASAKI, Yuko NAGAMURA, Naho DOKYU, Tashi PENJOR, Ugyen M TENZIN, 「How To Determine Essential Values of Landscape To Be Preserved? An Interdisciplinary Challenge in TRONG Village of Zhengang」、International Conference "Landscape & Values: Place and Praxis,12,2016,393-399
9. 宮脇勝, 鎌田祥史 「古写真を用いた歴史的景観の観察方法に関する研究 -愛南町外泊地区の石垣の文化的景観キャラクターイゼーション-」、都市計画論文集、51(3)、2016、320-327
10. 宮脇勝, 岩田純, 「超高層建造物の高さに応じた視覚的影響の及ぶ範囲 ZVI の推計モデルに関する研究 -風の塔(96m)、千葉ポートタワー(129m)、千葉火力発電所煙突(203m)、横浜ランドマークタワー(299m)の評価-」、都市計画論文集、50(3),2015,1122-1129

- 11.尾野薫, 星野裕司, 増山晃太, 「都市空間において記憶された経験を捉えるための一試論」、土木学会論文集 D 1、71,2015,133-150

〔学会発表〕(計 120 件)

1. 蝦名遼祐, 福井恒明, 「情報メディアを通じた風景体験における景観把握モデル構築にむけた基礎的研究」、第 13 回景観・デザイン研究発表会、2017.12
2. 佐々木葉, 「土木イノベーション・パイ・デザイン」、第 13 回景観・デザイン研究発表会、2017.12
3. 松田楓, 星野裕司, 増山晃太, 「ましきラボ」における復興まちづくりの実践」、第 13 回景観・デザイン研究発表会、2017.12
4. 星野裕司, 増山晃太, 小林一郎, 「白川・緑区の区間のデザイン」、第 12 回土木学会景観・デザイン研究発表会、2016, 12
5. 佐々木葉, 岡田智秀, 山口敬太, 出村嘉史, 「恵那市における景観まちづくりの実践の歩みとそこからの学び」第 12 回土木学会景観・デザイン研究発表会、2016, 12
6. 福井恒明, 「土木景観・デザインの取組展開と課題」、第 12 回土木学会景観・デザイン研究発表会、2016, 12
7. Kuniaki Sasaki The possibility of Text Mining to Extend the Sphere of Behavior Analysis 6th International Seminar on Tourism research 2015.6.1
8. 湯川竜馬, 山口敬太, 久保田善明, 川崎雅史「地域の「経験資源」の顕在化手法に関する実践的研究」、第 51 回土木計画学研究発表会、2015.6.7
9. 西村奏絵, 佐々木葉, 「地域認識の把握手法に関する研究レビュー」、第 51 回土木計画学研究発表会、2015.6.7

〔図書〕(計 3 件)

1. 西村幸夫・宮脇勝、他、「まちを読み解く 景観・歴史・地域づくり」、朝倉書店、2017 全 146 ページ

〔産業財産権〕なし

〔その他〕

早稲田まちづくりシンポジウム 2017 地域の持続のかたちを考える—千年を生き続けた知恵を活かしふるさとの暮らしを未来につなげるために 講演資料集、2017.7 全 250 ページ

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木葉 (SASAKI, Yoh)

早稲田大学 理工学術院・教授

研究者番号：00220351

(2)研究分担者

平野勝也 (HIRANO, Katsuya)

東北大学 災害科学国際研究所・准教授

研究者番号：00271883

山田圭二郎 (YAMADA, Keijiro)

金沢工業大学 建築学部・准教授

研究者番号：00303850

岡田智秀 (OKADA, Tomohide)

日本大学 理工学部・教授

研究者番号：10307796

佐々木邦明 (SASAKI, Kuniaki)

山梨大学 大学院総合研究部・教授

研究者番号：30242837

宮脇勝 (MIYAWAKI, Masaru)

名古屋大学 環境学研究科・准教授

研究者番号：30280845

福井恒明 (FUKUI, Tsuneaki)

法政大学 デザイン工学部・教授

研究者番号：40323513

羽藤英二 (HATOU, Eiji)

東京大学大学院工学研究科 (工学部)・教授

研究者番号：60304648

星野裕司 (HOSHINO, Yuji)

熊本大学 くまもと水循環・減災研究教育センター・准教授

研究者番号：70315290

山口敬太 (YAMAGUCHI, Keita)

京都大学 工学研究科・助教

研究者番号：80565531

福島秀哉 (FUKUSHIMA, Hideya)

東京大学大学院工学研究科 (工学部)・助教

研究者番号：30588314

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし